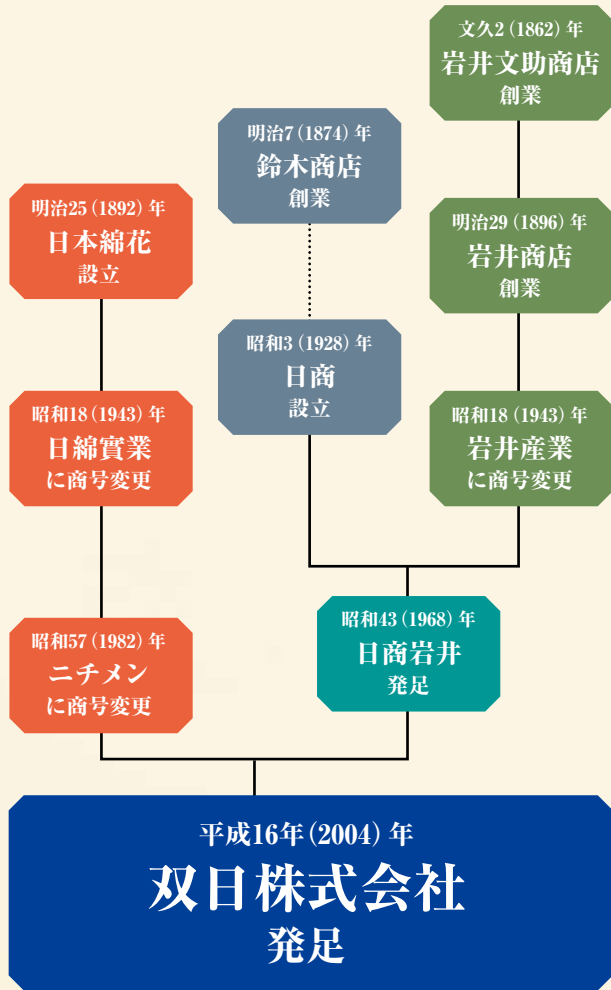


双日の系譜



双日への軌跡 源流から現在へ

双日の源流となる3社の現在へと至る軌跡は、戦後復興、高度経済成長、オイルショックなど激動期においても日本の産業界を連続と牽引し、グローバル化の潮流を生み出してきた。

日商



▲戦後の日本の船舶業界をリード

日商
岩井



▲1971年、米・ナイキ社の前身であるBRS社と取引を開始。写真は2011年、ナイキ社から双日に贈られた「銀の靴」

日綿
實業



▲中国に強みがある日綿實業は、南郷三郎相談役が1958年に訪中し、毛沢東主席と会見。1960年には大手商社として初めて友好商社に指定

岩井
産業



▲1955年、ブラジル鉄鉱石の輸入を開始

日商



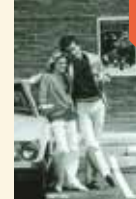
▲1956年、米・ボーイング社と代理店契約を締結

日商
岩井



▲1973年、ジャカルタで行われた日本最大のインドネシアLNG導入プロジェクト調印式

日綿
實業



▲日綿實業は米・マックレガー・ドニガー社とブランドのライセンス契約を締結。1963年、マックレガーが日本に上陸



歴史展示

双日の創業

双日の源流となる
岩井商店、鈴木商店、日本綿花。
日本の産業革命を牽引したこれら3社を
設立・発展させた先人たち。

ペリー来航による日本開国。
鎖国によって時代の潮流に取り残されてきた日本には、その地位の低さを思い知る商人たちがいた。新しい時代が到来するなか、官でも財閥でもない、豊かになりたいと願う彼ら商人たちの熱い志が、日本の産業革命を牽引していった。



そして今、双日グループは、**誠実な心で世界を結び、
新たな価値と豊かな未来を創造すること**を
企業理念に掲げ、**新しい次代を拓いていきます。**

今から100年前の第一次世界大戦のさなか、日本は輸出を急拡大させ、債務国から債権国に転じた。同時期、鈴木商店は売上高で日本一となり、日本綿花の扱う綿製品の輸出は膨大な外貨をもたらし、岩井商店は製造事業の拡大を進めるなど、この3社の企業群は日本最大級の規模で産業界をリードしていた。
そして今、双日は「New way, New value」のスローガンを掲げ、先人たちの志を未来につなげようとしている。

岩井商店

岩井勝次郎 像

岩井商店店主。明治・大正期に輸入品の国産化を進め、現在のトーア紡コーポレーション、ダイセル、日新製鋼、トクヤマ、関西ペイント、日本橋梁を設立し、最勝会の基礎を創る。

(生没年 1863～1935)
(2016年制作)



岩井家本邸

(設計：河合浩蔵)

1916年、岩井勝次郎は神戸の御影に本邸を新築(1945年、空襲により焼失)。



長岡禅塾

経営に禅の精神を取り入れ自らを律した勝次郎は、晩年、恐慌による人心の荒廃を憂い、京都の長岡京に長岡禅塾を創設。

訓示 〈大正8(1919)年〉

岩井勝次郎は、第一次世界大戦終結後の反動不況を予測し、訓示を制定。幹部は、豊かな先見性を持ち、明快で統一的な仕事の方向付けをすること。ビジネスは自社本位ではなく、まず取引先の満足を考えること。常に社員や資金など経営資源と営業展開のバランスを心掛けること。「狭き深き」を主眼とし、重点主義であること。また、投機の禁止、登用の公平性、書類の整備の重要性などを説いている。この訓示の精神は現在の最勝会企業にも語り継がれている。



鈴木商店

鈴木よね 像

(本山白雲 作)

鈴木商店創業者の鈴木岩治郎の死後、金子直吉、柳田富士松に経営を一任し、店を継続。「お家さん」と親しまれた。2014年には鈴木よねを題材とした小説「お家さん」(玉岡かおる著)が読売テレビにてドラマ化された。
(生没年1852～1938)
寄贈：西川 泰



金子直吉 像

(本山白雲 作)

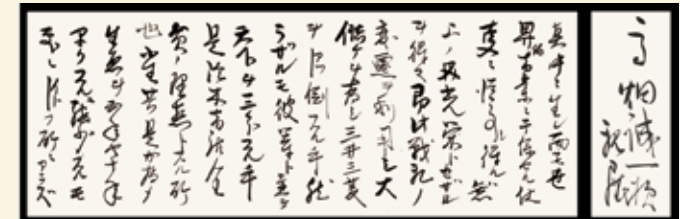
財界のナポレオン・煙突男と呼ばれ、明治・大正期に神戸製鋼所や帝人など80もの事業会社を起業。鈴木商店を日本一の総合商社に導いた立役者。
(生没年 1866～1944)
寄贈：西川 泰



高畑誠一 像

(北村西望 作)

鈴木商店ロンドン支店長、日商創業者・会長。第一次世界大戦中、連合国相手に強気のビジネスを展開。「皇帝を商人にしたような男」と恐れられた。
(生没年 1887～1978)
寄贈：高畑 二郎



天下三分の宣誓書 〈大正4(1915)年〉

第一次世界大戦中に、金子直吉がロンドン支店の高畑誠一に送った天下三分の宣誓書。鈴木商店は1917年に三井・三菱を抜き日本一の総合商社となる。「三井三菱を圧倒するか、彼らと並んで天下を三分するか、これ鈴木商店全員の理想とするところなり。」

日本綿花

日本綿花社長と発起人

創立発起人代表である初代社長の佐野常樹は農商務省出身の官僚。日本綿花発起人は合計25名。江戸時代から続く豪商ばかりで、その多くは維新後、新たな分野として銀行、紡績業などに進出。加島屋の広岡信五郎は、2015年秋のNHK連続テレビ小説「あさが来た」のモデルとなった広岡浅子の夫である。



佐野常樹 (初代社長、創立発起人代表) 田中市兵衛 (第2代・5代社長、発起人) 嘉多又蔵 (第7代社長) 広岡信五郎 (発起人)



木原忠兵衛 (発起人) 岡橋治助 (発起人) 亀岡徳太郎 (発起人) 野田吉兵衛 (発起人)

日本綿花社長と発起人のレリーフ
(2016年制作)



日本綿花本社

(設計：辰野・片岡建築事務所)

1893年、本社を大阪・中之島にあった五代友厚邸の隣接地に設立(右。左は新本社ビル)。五代は、大阪商法会議所(現・大阪商工会議所)の設立を提唱し、近代大阪経済の父と呼ばれた。日本綿花発起人は五代と親交の深い商人が多く、こうした背景から双日の大阪商工会議所の会員番号は01番となっている。

インド、東アフリカでの綿花調達

日本綿花は創業後、インド、中国、米国、ビルマ、そして東アフリカなど世界中から綿花を調達し、当時日本最大の産業であった紡績業向けに供給した。



日本綿花設立の旨趣

〈明治25(1892)年〉

「ここに、日本人の手によるインド綿と米綿の売買、貿易業を経営しようという動きが起きてきた。(略) このまま傍観すれば、必ず外国商人が日本市場を支配する情勢である。(略) わが国の基幹産業として発展途上にある綿糸紡績業の命運を左右する重要問題であり、われわれが会社を設立する使命でもある。」



大阪市立大学学術情報総合センター所蔵